

アドヴェント第二マタイの福音書 1 章 18-25 節 「思い巡らすヨセフ」

小池 宏明 牧師

アドヴェント第2の主日を迎えた。今回は、マリアと婚約していた大工のヨセフの悩みと苦しみからくる思い巡らしに注目する。

* 悩み苦しむヨセフ

18 節で福音書を記したマタイは語る。「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。」驚くべきことが告げられた。ヨセフはマリアから個人的に御使いが顕われたことや、妊娠のことを聞いたと思われるが、にわかには信じられなかつただろう。マリアが、その後すぐに親類のエリサベツ（祭司ザカリヤの妻）の所に行きしばらく滞在していたため、ヨセフは、何ヶ月も一人で悩み苦しんで葛藤していたのかもしれない。19 節「夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかつたので、ひそかに離縁しようと思った。」旧約律法によれば、婚約中の妻が姦淫によって妊娠した場合、ユダヤ人の中から憎むべき罪を取り除くために、必ず、処刑しなければならないと決まっていた。（申命記 22 章 13-24 節）ヨセフは、マリアをさらし者にしたくなかつたが、律法を守る正しさのゆえに葛藤していた。

* ひとり思い巡らすヨセフ

この時のヨセフは、誰にも相談できず、思い悩み、思い巡らす人だった。主なる神様がヨセフに与えられた試練は、ヨセフの人生を狂わせるような重大なことだった。マリアとお腹の赤ちゃんを守るのか、それとも見殺しにするのか、ヨセフの決断にかかっていた。20、21 節「1:20 彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。1:21 マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」主なる神様は、一人ひとりに、相応しいときに、ご自身の計画を示される。ヨセフはマリアが聖霊によって身籠ったことを、信じて受け入れた。

* 静まる時を大切に

今日は、クリスマスを前にして、悩み苦しむ、思い巡らすヨセフの姿を見た。それは、主なる神様が与えた「ひとりになる」大切な時だった。今日も私たちは、さまざまな痛み、悩み、葛藤の中にいる。クリスマスのさまざまな行事や交わりを大切にしつつも、主の御前に出て、御ことばを思い巡らす時を聖別していきたい。